
君。。。*

ゆづゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君。。。*

【Nコード】

N3914D

【作者名】

ゆづゆ

【あらすじ】

ゆづゆと嶺は中学の入学式の日隣に隣にそこから恋におちていく。。。そして2人の結末は。。。*

あなたは覚えていますか？
隣の席だった頃の事を…！

…中学生…

春から私は中学生になる！
待ちに待った・・・入学式の日私は不安と緊張とワクワクする気持ち
が私の中に舞い上がった。

『どんな子がいるのだろう？』 『友達は出来るかな』
私はゆつくりとクラス名簿を見た・・・

『えっと…私の名前はあ…あっ！あつた・・・』

『石川ゆづゆ』

『1年5組かあ 楽しくなるといいなあ』 『は5組の教室へと足を
運んだ

知らない人ばかりだった・・・
重い足取りで一步一步、歩き自分の席へと着いた

着慣れない制服、見たことのない友達、私は戸惑いを隠せなかった

『ゆづゆー！！』

すらっとした美脚に整った綺麗な顔、そう私の大好きな友達【谷村
美玲】だ！

『ああー美玲 』

『もう！ゆづゆどこ行ってたのぉー探したんだよー！』 『マジッ！』
めーん 』

どうやら私の事を探してくれていたらしい・・・

『みーれーいー！ー！』

この声の正体は…そう美玲の彼氏（笑）

『何イ？今ゆづゆとお取り込み中ですーす 』

『美玲！ー！ダだよ メほら行きなあー 』

『ゴメンねえ 』

小学校からのバカップル いいなあー！羨ましい

そんなことをしていたら教室に担任の先生が入ってきた！
男の先生だった

『じゃあまず隣の席の子と友達になりなあー 』
そう先生は笑顔で言う！

私の隣はあゝゝゝってまだ来てないじゃあん

そう思っていた瞬間ドアが開いた！

『ガラガラゝ 寝坊しましたあー！ 』

『次から寝坊すんなよ！席はあ石川さんの隣だッ 』

初日そうそう寝坊したコイツ！ 『小島嶺 』

なにか胸が締め付けられるよーな変な感覚に襲われたんだ・・・

こう言うのを『一目惚れ』って言うのかなあ・・・？

私はこの時のことを今でもちゃんと覚えている 『ゆづゆ 部
活何部に入る？』 『部活かあ？』

『私は吹奏楽部に入るつもりい』 美玲はすごい

『私はテニス部に入りたいなあ』

あいつは何部に入るんだろう？
一緒だったらいいなあー！

私はいつしかあいつの事ばかり考えていた…

放課後……

『ああー……』 私が見る先には《小島嶺》
あいつもテニス部だ！！！！

嬉しくて嬉しくて…
たまらなかった！！

でもこんな嬉しい事ばっかぢゃあなかった・・・

ある日いつものように美玲とおしゃべりで盛り上がっていた・・・

そこヘクラスの女子の何人かが歩いてきたんだ・・・

『あのねえ！あたし・・・小島君の事が好きなの！みんなとらないでねえ！・・・』

そういつて去っていった！

えッ！！！！！！

あの子と付き合ってるの？

小島！あの子の事好きなの？？

私は声をあげて泣いた・・・

『あああ・・・目腫れちゃったよお』（ノ）>。（）。。

それに小島は気付いてくれたよね！！

『目！晴れてんぢゃあん』

君はいつだって優しくかったね…！ゆづゆ…ね！
嬉しかったんだよ
でも冷たい態度をとっちゃってゴメンネ…

静かな教室…に2人だけ

私の中のコップはあなたへの甘い気持ちで溢れていたんだッ
！！

気がついたら…

あなたへ言っていたんだ

『好き』言つつもりなんてさらさらなかったのに、

あんのじょうあなたは困ったよーな戸惑ったよーな顔をしていたね
！…

目があった瞬間君は…

『ゴメン…』

ただそれだけを残して去っていった・・・

静か教室に一人・・・

なんか胸にすごい激痛がはしる…『言わなければよかった』ものすごい勢いで後悔の嵐が私へと降り注ぐ…

あんか胸の奥に穴がぽっかりあけたよーなそんな感じだった・・・

私の頬には大粒の雨が降った・・・

明日は何があってもおとずれる…

またいつもと変わらない朝だけどまったく違う朝…

重い足取りで学校へ行った

チャイムが鳴り響く！

なのに小島はこなかった…

次の日も次の日も・・・

なんで??

そう思うと同時に私は走り出していたんだ…

向かった場所は小島の家だった…

そう気付いた瞬間チャイムを鳴らしていた!!

『はい』できたのは小島の母だった

あいつはお母さん似なのかなあ

とても綺麗で色白で優しい人だった…

『あのッ!! 嶺君は?』

・・・

『れッ嶺? 今寝てると思うわあ!』

『そうですかあ!!...』

なんかさっき真かあいてなかった??あれは気のせい??

なんかすごくそう感じたんだ・・・

すると!!--!!

『ゆづゆちゃん!』

小島のお母さんが走ってこっちに来る!!

『やっぱりゆづゆちゃんだけにはホントの事話すネ』

ほらね!やっぱりなんかかくしてたんだ・・・!!

『嶺!今病院なの!』

えッ????なんで??

『嶺 は重い病気なの』

なんで?この前まで元気にテニスしてたぢゃあん?

ねえ?うそだつて言つて!

お願いだから。。。

私はそこで泣き崩れていた

嶺のお母さんは力いっぱい抱き締めてくれた*。。。。

私は嶺のところへ向かった

お天気キャスターの森田さんは今日は雨と言っていたのに雲一つな

い清々しい青空だった・・・

嶺の病室！私はいつきに現実へと引き戻された…

おそろおそろドアを開けた……

久しぶりに見る嶺の姿があった・・・

嬉しかった…

『ゆづゆッ！！！！！！』

『きちやった！！』

私はもう目に涙を浮かべていた。。

『あたし！やっぱり小島が好き！！』

・・・

また振られる……

『俺も！！ホントはずっと好きだった』

私は涙が止まらなかった…

私達はすれ違った日々を埋めるように！！

初めて一つになった・・・嬉しかった大好きな君と一つになれた事が…………

『ゆづゆッ大好きだよ…ずっと俺の隣にいてなッ』

君は初めて会ったあの日のように頬を真っ赤に赤らめていた…

『うん…ゆづゆッずっと隣にいるから、』

『結婚しよーな』

私達は神様に誓った…

だけど・・・

ねえ、、、もしもこの広い世界に神様がいたとしたら私達を離れ
ばなれにさせないで...

私の隣にはもう君はいない

神様は意地悪だね！

君がいればもう他に何もいらなから...ワガママ言わないから...

『ゆづゆッ！泣くな！俺はずっと隣にいるから！』

私にはそう聞こえたんだ

ねえッ嶺あの約束ははたせなかったけど...

ずっと隣で笑っててネ

いつか大切な人と巡りあえたとしても嶺の事はたせなかった忘れな
いよ

だからその時は見守ってネ

ゆづゆ大好きだよ！

あたしも！

ずーと愛してる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3914d/>

君。。。*

2011年1月28日01時47分発行